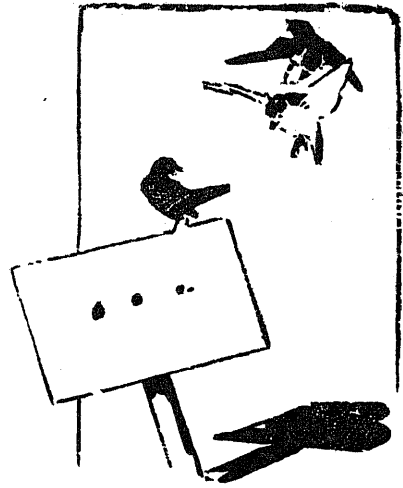


家庭のしつけ



太田龍東

家庭は、我が帝國第二の相續者を出す本家本元である。この本家本元たる家庭に於ける躰のよしあしに因つて、相續者の人物如何に大なる關係を有するものであるから、家庭の任務中、躰は最も大切なものである。

學校教育でも家庭教育でも、この躰は最も大切なものであるが、又これほど六ヶ敷ものはなからうと思ふ、彼の植木屋が、庭園の松の木一本育てるのさへ、枝を曲げたり直ぐにしたり、或は肥料の梅鹽或は日光の加減、なんとかかとか云つて其朝夕の骨折は一通ではない。若し斯んなにして培養しなかつたら、草木一本でも碌なものにはならないのだから、況して人間を育てるには仲々骨の折れたもので、この骨の折りやうで、曲つた人間でも直ぐな人間でも自由になるのである。

元人の性は善であるか悪であるかと云ふことは、西洋に於ても種々の説があり、又東洋に於ても、告子の如きは、「性は杞柳の如く又湍水の如し、本善惡に分るゝ事なし、只心外の道たる義に依つて薰陶せられて善となる」云ひ、孟子は之れに

對へて「杞柳の固有性あるが如く流水にも又固有性あり、人にも又仁義をなすの固有性あり、而してこの固有性は性なり、人の有性たる所以を以て何ぞ人性と他物との區別するあらん、人には他の万物と異りたる固有性あるあり。この固有性即ち善性なり。」と云つてゐる。が、今こゝには性其もの、研究ではないから、深く述べる必要もないが、兎に角、人は生れると、善にも惡に染まる心のあるものだと言ふことが知ればよい。こゝが墨子の所謂白い糸のやうなもので、染めやう一つで以て、白とも赤とも黒ともなる大切なきはどい所である。

一

實に小兒は純白無垢なもので、耳に開いたり目に見たり眞似をしたりして種々なことを知るものだから、墓場の傍に住めば葬禮を出す眞似をした

り、商買人の側に住めば商人の物賣るさまをしたり、學校近隣に住めば生徒の眞似をする様になる。居所の撰み方も養育上大に注意せねばならない。余の知れる人に非常に釣の好きな人で、東京深川の八幡宮の近隣に住んでゐる人がある。其人の子で今年七歳になるのが、時々父に従つて釣に行つて、時には釣竿を持つて魚の一疋位釣ることがあるので、釣の爲やうは覺えてゐる。ある時のと、公園内の池に大きな鯉が澤山をるのを見て、例の釣道具を出し、獨りで釣に行つたものと見へ、大きな鯉を一尾さげて歸つて來た、よく聞いて見ると全く公園の鯉を釣つたことが知れて、親は其後始末に大に閉口したと云ふことを聞いた。又ある手の友人の家に六歳ほどの女の子がある。この友人は、書物に書入れをよくする人であるが、あ

る時蟹江博士の西洋哲學士を買求め、一度も見ずして机の上ををき、學校に行きし後にて彼の少女が書入の眞似をしたものと見へ、書物を開いて見るとサア大變、どこもかも眞黒で丸で草紙同様。

こんな風に、小兒は何んでも猿の様に人眞似するものであるから、親は充分注意して、惡い眞似を爲せない様にせぬばならぬ。併し親は、口で異見するばかりで、自分が惡い行をしては駄目です。予が知人の細君に、極く買喰ひの好きな人があつて、自分は一日に四五度は必ず、菓子とか焼芋とかを買つて食ひながら、十二と九歳との小兒があつて之れが物を乞ふと、「人は間食は毒です、買喰する者は大馬鹿です」と異見するのを見た。自分が手本を示してをいて、小兒の躑を八ヶ間敷云つても、それはとても行はれぬことである。

そうして躑をするのに、ある程度まではどうか知ぬが、嘘を吐くことは大に慎むべきことである。彼のお化が出るなど云つて、夜一人で便所にも行けない様なことにするのも、親が嘘を吐いて憶病者としたので、決して其子の小膽ばかりではない。予の今居る隣家に五歳の男の子がある。この子は至つて腕白で少しの事に驚くやうな子ではないが、一度大層機嫌を失して如何に云つても聞入れないで泣いて地鞆踏ふんで殆んど皆が持て餘した。時に恰度越後獅子が、笛を吹いて太鼓を鳴してやつて來た。それで母親は、その小兒を抱へて獅子の前行き、「お獅子や、この子を噛んで遣つて下さいな」と云つたら、其子は獅子の顔を見るに、とすぐ泣は止んで、青い顔色になつて母の懷中に首を入れた。其時は獅子の効能があつて好かつた

が、其後は、笛の音や太鼓の音が聞へると大變、大きな聲で泣いて押し入れの中に飛んで這ると云ふはき。それがすぐ泣を止めればよいが、仲々以て一通の手段では機嫌が直らないから、今では大に困つてゐる。何時かも、母親が其子を背負つて、親類に御使に行く途中、向ふから救世軍が太鼓や手風琴を鳴して軍歌を遣つて來た。すると小兒は先日の獅子と間違へて、例の脊中で地鞠踏を初め、母親は一方ならぬ迷惑したと云ふことである。

それだから、小兒に言葉一つ云ふにも注意せねばならぬ。彼の孟母が、孟子に獸肉を與へて自分の嘘を誠にしたと云ふが如きを見ても、如何に孟母が養育に注意したかは察することが出来る。孟子が、聖賢と尊はれるに至つたのも、この賢母の賜と云はねばならぬ。世の母親たるものも、よ

くこの邊を心得て育兒されるがよい。それであるのに、社會の中流以上に位せる人の中に、子供の前で大酒を呑んで、見るに見られぬ舉動なし、后で小供に反問されると、あれは酒に酔つたから、と酒に負せて少しも耻づる色なきに至つては、言語同斷も甚しいではないか。予は斯の如き人を見ると、頭から嘔でもかけて遣りたい様な氣がする。まだ甚たしいのは、好い年をしてゐて、妾を置いて毎晩酒を呑み、自分の子供の前にならべて、妾と巫山戯狂ふて見せるなどに至つては、實に例令やうがないではないか。よく知人の例を引くやうだが、こうなると言はずにはおれない性質。其日まで日誌に附けてゐるから分るが、今より五年前、即ち明治三十四年六月十八日であつた。淺草の大門這入つて夜店を見てゐると、予の知人で銀行員

某が、其子で十五才になる娘と十二才になる男子とを連れて散歩してゐるのに出會た。「今晚は僕が行く所に一所に來給へ」と云ふので予は御供した。施て料理屋に上つて飲食をした所が、先生少し酩酊しだし、車夫に予等の一行を命じて妙な所に連れて行つた。予はこの時先方に着くとすぐ其儘逃げて歸つたことがある。今思ふとこの人の家庭が實に思ひやられる。

世が進化するに連れて道徳が進むかは知らないが、近時世の風儀が亂れて來るのも亦明である。これは社會が悪いのだと云ふ人があるが、その社會は一家の集合したものであるから、分子から正さねば團體の矯正は行はれない。大學に「其國を治めんと欲する者は先づ其家を齊ふ、其家を齊へんと欲する者は先づ其身を修む云々とあるのは、

この所を言つたもので、其社會國家の風儀を正ふするには、其家庭からして之れを修めねばならぬ。

右述べたやうに、家庭が荒れに荒れ果て、小兒の教育どころか、自分の身が修まらないから躑躅などは思ひもよらぬ所である、我國は中流以上に於て風儀が悪いのを見る。之れには種々原因もあらふが、教育の無いくせに金の威光で鼻を高くする實業家が其原ではあるまいかと思ふ。日本の實業家には道徳思想は夫れは幼稚なもので、彼の銀行會社員には、皆までではそうでもなからふが、多くは教育に乏しく、道徳などは眼中に置かぬらしい。今少し道徳を進歩させて、家庭をして兒童の羞惡廉恥心を形作るやうにせねば、社會の風儀は、とても矯正されべき見込はない。

學校がくかうでいくら教員けういんが汗水あせみを垂たらして修身しよしんの話をはなしして聞きかしても、學校がくかうから歸かへつて家庭かていに入いれば、正反對せいはんたいのことをして見みせて、學校がくかうの教きを水泡すいぼうに歸きせしむるやうなことでは何なににもならない。予よは茲こゝに今の學校がくかうを全然せんぜんよいとばかりは云いはないが、害がいになるやうなことは決けつしてない。それだから、家庭かていに於おいて少し注意ちゆういすれば、學校がくかうと相俟あひまつて教育けういを完まからしむることが出来る。そこで、學校がくかうと家庭かていの連絡れんらくは大おほいに必要ひつやうであるが、此點このてんは都會けいわいほど實行じつぎやうされてゐないのは、予よの最も遺憾いちかんとする所ところである。この路みちに當あたつてゐる人ひとに、この道みちを講かうずる者ものが少すくいのは如何いかなる理由りゆうであらふか、教育けういは机つくえの上うへの議論ぎろんばかりでは實際じつさい得えて期きすことは出来できないのである。それだから、往々家庭かうくがていと學校がくかうとの間あひだに意志いしの不通ふつうを來きたして、互あひに變へんな思おもひをすることは少すくなく

ない。この點てんは家庭かていよりも學校がくかうが冷淡れいたんな所しよがないでもない。これ等の點てんは、又時またときを得えて他日たじつ述べるとして、父兄ふけいたちが、小兒せうにを學校がくかうに托たくしてそれで育兒いくじの事ことを安心あんしんしては大間違おほまちがひ。學校がくかうは其方法そつぽうを授まづけるに過ぎすぎなくて、之これを訓練くわんれんするのは家庭かていにあるのだ。學校がくかうは訓練くわんれんを放任ほうにんする譯わけではないが。時間じかんに制限せいげんがあつてとても完全くわんぜんには行ゆかない。だから家庭かていで充分訓練じゆうぶんくわんれんせねば、學校がくかうの教育けういも旨うまく功かうを奏そうせないことになる。然しかるに、父兄ふけいの口くちからして、「この兒こは學校がくかうに行ゆき出してから大層行儀たいそうぎやうぎが悪わるくなつた」など、云いふのを耳みみにするが、それでは學校がくかうは不行儀者ふぎやうものを養成やうせいする所ところのやうで、大變惡者たいへんわるものになつて了しまふ。前まへに述のへた様に、學校がくかうに入いれたら自分じぶんの内うちでも養育やういくに注意ちゆういして、共々ともどもに之これを勤つとめたならば、決けつして前まへ

より悪くなることはない。學校に入れたが最后、家庭の教育は止めて了まふから、そんな結果を來すのに相違ない。

これは中等教育の方になるが、予はこんな話を聞いたことがある。ある田舎の人が、その娘を東京の女學校に入れた。親では五年も女學校で勉強させたから、學問は云ふに及ばず、裁縫でも生花でも育児でも、其他家事のことは万端昇事に出來るだらうと思つてゐた。すると先生卒業して錦衣歸郷と相成つた。所が親たちは案外。成るほど學問は出來るだらふ、横文字もペラ／＼讀むし、日本文もコテ／＼綴るが、裁縫は田舎で習つた姉の方が旨い、家事の方は下女がよほど上手だ。こゝに至つて父君曰く、「女なんか深く勉強さしても何にもならない、理くつばかり上手になつて、

羽織一つ碌に縫へない。」と、世の中にはこんな人が澤山あるに相違ない。女學校に入れたら何んでも出來など、は以ての外である。女學校を出たら、それからは父母の任にあるから、この任を旨く果さないと、今迄の苦心も水の泡となることがある。親心として、自分の愛子を悪く育てふと思ふ者は一人もなからう、皆立派な人に仕立てたいに相違ない。が、只思つたばかりではよくは育たないから、充分注意に注意を加へ、天晴な人を養成せねばならぬ。茲に一つ注意して置くことがある。可愛がるのはよいが、無茶苦茶に可愛がり過ぎてはよくない。之れは世間に間々ある例で、一人娘とか一人息子とかである、子の好きなやうにして遣つて、終りには仕方ない人間にして、了つて先祖傳來の財物は飛んで人の所有となり、頼みに

頼んだ子供は何所にや逐天し。頭は白雪を戴き腰は梓の弓となり、住むに家なく食ふにものなく、養ひくれる人もなくなると云ふやうな例は、随分耳にせんでもない。皆この人等は、子を養てるに其大切な躰の方法を過つたものと言はねばならぬ。

要は只、兒童を養育するには、學校教育のみに放任せず、又愛に溺れずして旨く躰し、以て社會の一員たるに恥ぢない人間を陶冶するまでのこと。

### 長命法

長生の秘訣として讀賣新聞に左の長壽者の實驗を記載したり

近刊のクランドマガジン雑誌は知名の士にして

八十歳以上の高齡に達したる人々の姓名を掲げ併せて其の日常生活の方法を略記せり而して斯は疑ひもなく長命を希望する人々に向つては一の新知識たるを失はざる可しと。

グウイドル卿、九十五歳、禁煙、室外運動、萬事に節制。

グリムソルブ卿、八十八歳、禁煙、節制。

ネルソン卿、八十二歳、禁煙、夙起、節制、醫藥を服用せざること。

ダブリユー、ハギンス男爵、八十一歳、禁煙、少量の肉食に牛乳。

ダブリユー、エル、ドリンククウラーター男爵、九十二歳、禁煙、屋外運動、七時間睡眠。

マイヨル教授、八十一歳、禁煙、嚴格なる菜食、運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

十二歳、禁煙、屋外運動、七時間睡眠。

マイヨル教授、八十一歳、禁煙、嚴格なる菜食、運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。